



るっ

言村律広・綾風花南

やんぼが、ぐるりしてんであった。

それは、まるで、、、のように、であることに近い。

しゃっぽが叫ぶ。狂気のドリルが、計算ドリルが+と×の中間の傾きに記号をねじり込む。

やんぼー！

やんぼー！

「そうだ。分かったことがある。これは狂気ではない」

一一一 十近い年齢をもとめせずに、学習機に向かう。デスクトップのキャラクターが笑いかける。計算ドリル。どりどり。

「首を戻せ！ 首を返せ！ 我が首！」

曲がり、振っていたのは根性だけではなく、首であった。

しゃっぽを放り捨てる。やんぼー！

首無し三十は、放り捨てたしゃっぽに飛びつく。捨う。また投げる。ぐるりしてんである。

箱庭の小部屋に現れたのは、ぐるりてんをこよなく愛する、るつ天狗であった。るつ天狗のその、あまりにも長い鼻を、ずりりと突っ込んだことで、ぐるりてんは消える。しゃっぽは叫びを終える。首無し三十は黙り込む。るつ天狗は、るつ天狗はまだ、現れきらない、入りきらない。

やんぼー！

しゃっぽが断末魔やんぼーを叫ぶ。

るつ天狗ツ鼻が突き破り、しゃっぽは、ちよーかに進化した。だがしかし、収まるべき場所とは違

う。ここは首ではない。鼻だ。

やっぼい！

進化した言語で高度な会話を繰り返す。が、一人では会話は成立しない。

首無し三十、首が無い。ゆえに話せない。セリフは、ある。

「やめて！ もうやめて！」

呟きである。ささいなことだ。実にピロートークな脱力感を伴って、警告が響く。

「隕石を降らせるのは、もうやめて！ 地球はもうフルボッコよ！」

時は白亜紀か、どこかそのあたり。恐竜は滅亡しようとしていた。大洪水によって。

ノアよ、立ち上がれ！ 世界中の動物を収集せよ！ 微生物もだ！ ミクロン単位まで、洗いざらい

攫って行け！

こうして、惑星はノアと名づけられた。

「駄作ね」

「駄作だな」

「つまらないとかいう以前に、分からん」

「それも高尚な難解さじゃなくって、可哀そうに感じる分からなさだね」

次々と批評が飛び交う。概ね好評を博することができ、**上神守歌**は、披露した紙芝居を満足とともにカバンにしまった。充足とは、なんと心地の良いものか。

「やんぼーって何さ？」

隣

に居た、演劇部員の友人が問う。**忍尾汐志雄**、そこに気付くと、さすが演技の男。守歌は、にんまりと笑む、八重歯ギラリ。

「叫んでみるといいわよ、さっきの私みたいに。最高なんだから」

これで汐志雄の演技力はさらに向上することだろう。だが、まだまだ守歌はさらに上を行く自信があった。頂点は遙か遠く、地獄はいつも近い。

「くだらないわね」

最初に駄作だと賞賛を浴びせかけた友人が言った。魂部に所属する**鼓舞湖歩瘤子**は、
え！ マジ？ 自分の内蔵見たこと無い？ 自分の内蔵見たこと無いのは小学生だよ
腸腸絶絶巧巧術術の若き使い手であり、紙芝居という超常現象を支配する守歌とは良きライバルである。

「悔しいのは分かるわ。でも認めることから次の一步は始まるのよ」

魂部で腕を磨いている以外に、自主練習も欠かさない歩瘤子のことだ、すぐに守歌を追い越す腸絶技巧術を披露してくるに違いない。

「にしても、るつ天狗はないよ。なんだよ、るつ、つてさ」

指摘を行ったのは教師である。**狂虚右京居**は担任であり、生徒であり、落ちこぼれでもあるという、このクラスの三冠王である。だが、ここに集まっているメンバーの中では最も弱者なのだ。残念ながら、

三冠など胎内で飽きるほど獲得したという猛者が、この夕べには顔をそろえている。

「るの素晴らしさが分からないとはね」

だから、守歌も単にそうとだけ返した。右京居にとっては、良い薬になっただろう。

「ところで、最後に警告を出したのは、誰なの？」

さすがに理解力がある。強靱な解析能力をもって、何事をも透徹しきる達人である**灯塔刀徒**において、質問とは的確なもの以外を意味しない。的確でなければただ、絡んでいるだけだ。

「さすがね。ここが、今回の読者への挑戦状よ」

守歌は、真っ直ぐに刀徒を見据えて言い放った。いつも最速で解決を導く、それがこの**安息醍脳**を激戦の末に手にした人物、級長閣下である。

沈黙が静かに、層を重ねていく。**みいるふいーいゆうーんうーんうーんうーん**。

申し遅れたが、私は放課後の教室であった。

ここでジャッジである。大宇宙審問所は、大宇宙を内包する大宇宙を審問するために設立された、大宇宙における一機関である。

☆よめるものならんてみろ△は優れた審問官として、忙しい日々を送っていた。

だが、事件はいつも唐突に起きる。むしろそうでなければ面白くない。

侵攻が始まったのだ、**ルッテン群**という無意識の集合体による意識ジャックである。

大宇宙から、観測権限を持たないものが、大宇宙を観測しているのだ。これを、裁かなければならない。だが、仕事をしたくない。今日は妻との初キッス記念日なのだ。

「あ、な、た」

目覚めの言葉だけだ、その日に交わすのは。否、交わせるのは。

「おはよう」

☆■○△が、小さく唇を開いて、答える、そこに、妻の舌が割り入ってくる。唇をつける前に、二人は舌同士を味わいつくす。どちらのものとも知れない唾液が伝い落ちる。

絡み合うほどに、唾液の粘度は増し、長く、どこまでも意図を引くようになる。届け、**我らが愛!**これが一日続く。眠りに落ちる瞬間、ようやく唇が離れる。

と
ここで、宇宙である。重力は何処へ向かうのか、すなわち、二人の唾液の行き先である。これが、見事なことに審問書に落ちるのだ。覚えているか、☆■○△は優れた審問官である。それも極めて優れているとあって良い。書き記された言葉は、こうだ。

有罪。

右京居が担任でありながら落ちこぼれもできるという超人的な地位を維持しているのには、理由がある。

国は民のものである。

その言葉にのっとり、政府の民営化は、ついに教育委員会にまで及んだ。株式会社古露市教育委員会の誕生、三年前のことである。早速、校長は、いや学園内では陛下というのが呼称のだが、ともかく最大株主に収まった。

趣味は国作りと言って憚ることの無い、偉大なる陛下の御意のままに、学園には**何でもありである**。それが学園である。

学園は宇宙の意である。

ただの一人が三冠を得ることくらいは造作も無い。ゆえに、右京居などどうでもよい。

つまり、こういうことだ。大大大宇宙からルッテン群は侵攻している、大大大宇宙へ向かって。それが観測という手段によるとしても、無意識の群れであるルッテン群すなわち、有罪としては、存在を移動することと同義となる。だから、次に待つのは大宇宙、そして宇宙なのだ、学園なのだ。

あの長いキッスの日が明けて、唾液まみれになった部屋の掃除もしないまま、☆■○△夫妻は、るっ天狗を追う。すなわち無意識を辿り、内なる宇宙へと降りてゆく、大大大宇宙、大宇宙、学園と、順に。

君の中にも学園はあるのだ。

演

技者、汐志雄の演劇部での活動は朗読劇である。朗読をそのまま劇として肉体をもつて表現する。今しも、練習中だ。

『小説を書くということについて考える。それもしばしば、もう少し正鵠を射るなら、暇さえあれば。』
重々しく、話し出す。朗読が続ける。朗読が汐志雄を動かす。

『しかし小説は掛け算だ。』

逆接のとおり、汐志雄が全ての関節を入れ替える。逆に。

『したがって私達が探さなくては、無限大の感動を与えうる、畢竟の一言とも言うべく生の、自由の、感情。』

生、で剥き出したのは内臓である。てらてら。よく見ると、舞台の脇で歩瘤子が腸絶技巧術を操り、助演しているのが分かる。

『それは自動的なものではないかと思う。』

白 動的に、自然治癒力を凌駕する自動つぶりで汐志雄は、いつもの外見を取り戻した。きよろりと最後に目玉がゆれ、零れ落ち、ずらずと啜られて戻る。歩瘤子の集中が乱れた、るっ天狗が現れたからだ。その赤い鼻、無意識の集合体、有罪。

しかし、汐志雄が演技を止めることはない。**演技とは自分ではないものへと魂を移行してゆく技だ。**移植、それも強い拒絶反応を伴うこともある生体移植である。

『理性を手放し、自動的になった私たちは、生の感情に自由に触れることができる。』

汐志雄は理性を手放した。そこに、もう、奴はいない。るっ天狗が侵攻してくる。歩瘤子が防いでいる間に、次の意識への移行を完了せねばならない。

歩瘤子が意識ジャックされている間に、次の意識、**秋山真琴**は現れ出でる。

『それは言葉を、理性を捨てること。』

秋山真琴もまた、理性を捨てた。言葉も無い。あるのは、呻きとも叫びともつかない、**おろろん**とした音響だけだ。体の制御もない。

『現実とはつまりそういうことだ。』

現実が立ち現れようとしている。るっ天狗が、顕現する。このままでは、歩瘤子であった臓物袋と、汐志雄であった秋山真琴であった臓物袋がダンスを踊らざるを得ない。**ぐるってん。**

『未だ誰も現実を見たことがない。』

秋山真琴は、だがしかし、最後の力を振り絞り、抵抗を続けていた。るっ天狗と交渉を始める。すでに

言葉はない、だから無意識と対峙するに不都合はない。

『だからこれは提案だ。』

『文学2.0』

提案した、ハイパーテキストプレイ。

もちろんお分かりだろう、諸君。朗読は秋山真琴「文学2.0」である。

これは守歌の紙芝居だ。るつ天狗が登場した時点で気付くべきであった。

すなわち、紙芝居はハイパーテキストプレイである。また、ハイパーテキストプレイは文学2.0である。

これは文学、小説だ。いや、小説なのかもしれない。

読者諸氏、どう思う？ **これは小説か？**

ま

あ、かように読者に問いかけたところで、返事があるわけでもないのが、弱小不人気小説（家）の

哀しいところではある。しかしながら、こうして夜のテンションに任せてハイパーテキストプレイなんてハイカラな名前のことをやってみると、案外と面白く書けるから不思議なものだ。というか、楽しんでるの俺だけ？ いや、俺は放課後じゃないよ。

にしても、まずは君のことだよ。

君は、君の中の、ずっと奥の、そこにある学園を知っているだろう。いや、知らないかもしれないけど、そこは重要なことじゃない。

ずっと、ずっと、その奥深くへ潜って行くのが、君なんだ。つまり、まあ普通の人はなかなかやらないって意味だと、病気になる感じで、あるいは哲学者な感じで。

うーん、何が言いたいかわわってるかな。だからね。

結局は、そうだね、要約しちゃうと、**やんぼー！**

やんめの君、そう呼ばれる貴人がいる。幾重にもめぐらせた薄絹の向こうに、臙に影を見たことのある者は何人もいるが、それ以上の情報を持つものもない。

寝殿造りの、視界に収めきれない大きさを持つ建物、周囲に板廊がある中は、全てが畳敷きだ。規則的に柱が並ぶ。衝立を用いて、それぞれのスペースを仕切るのだ。

ここは、やんめの君の座所、その最外縁部。貴族どもが集い、面会のために待ち時間を過ごす場所だ。奥には、天井から吊り下げられた薄絹。

薄絹という種族について、知っている者はそういない。**大量被虐民**である。

その老若男女が首を括られ、幾重にも吊られている。

薄絹を透かして、やんめの君が現れ、貴族はその階級によらず、次から次へと言葉を影へと投げかける。君は黙ったままだ。

いつもならば、だ。

薄絹たちには暇を与えていた。貴族どもの来訪は全てキャンセルしていた。

広い建物に、**ひとりだけ**。灯塔刀徒。唯一、やんめの君を全て知る者。**曙光の童貞**一筋も差し込むか否かの時分である。

「やんめ、とは、病の目と書く。だが俺はそうは思えない。特に今日は」

「このような早くに来て、それとはな。おまえは**夜明けの敵**か」

「まさか。それよりも、見えているのだろうか？ 世界の危機が」

人影は、刀徒ひとりである。次々と差し込んでくる偽物めいた日の光によって、広げられた視界にも、どの隅にも、何もいない。中に誰もいませんよ、刀徒以外は。

「我が唯一にして億万にも勝る友人よ。けしておまえは親友ではない」

「こっちは安息醍醐があるんだぜ」

「我より奪いしもの、そのようなものなど」

「これで俺は、級長となった」

「き、級……長、とな」

「分かるか？」

無言は、押し合いではない。浸し合いである。どちらの言葉が、より相手を浸食するかを競う。意識の支配権を奪い合う。

刀

徒のもうひとつの脳、安息醒脳。やんめの君の元にあつたときには膨大な記憶のバックアップ領域としてのみ扱われていた、だが、刀徒はそれを完全なもうひとつの脳として**使い切る**。底知れない脳力を全て、引き出す。そのために随分と脳トレをした。走りこみは、やはり基礎体力の増強に極めて効果を発揮するのだ。

結果、級長という立場に、刀徒はある。級長閣下と呼ぶべきだろう。

「……聞こう」

やんめの君が言う。刀徒で満たされた意識。もう貴方の事しか見えないっ！

「おまえの病目には見えていないはずだ。獅子座ルッテン群の来襲が」

「ああ」

「それは、いつがピークになる？」

「未来に非ず、近日中であろう」

一拍を置くのは、そこで安息醒脳を鎮めるためだ。放熱が激しくなりつつあった。

「今夜にしろ」

「え、ちよ、おまじ」

命じるのは簡単なことだ。そうして、刀徒は立ち去った。

あとに残った建物は、やんめの君は、ただ立ち尽くしていた。

真唯は一人、リビングのソファにだらしなく寝転がり、**ぼんやり**と思考を巡らしている。

何をするでもない。思考すら理性を離れたところにある。制服も着替えないまま。

軽快、いや軽薄な音楽が部屋に小さく流れている。薄墨色だ。

ソードマスターである父、健二は今いない。学校から帰ってきたら、出かけると一言の書置きがあった。いつ帰るか、いつものことだが不明だ。

兄弟はいない。他にこの家に住むものはいない。

母は。写真立ての中にだけ、存在する。

真唯の記憶の中には、いない。覚えていない頃、すでに居なかった。

父

の心の中にも、もう居ないのだと真唯は思う。母が居た頃から、居なかったのだろう。だから、勝手に出かけるし、母は居なくなつた。

ひとり、めぐらしている。**どうどう。どうどう。どうどう。**

どうどう。どうどう。何をするでもなく。

どうでもいいこと、どうでもいいキャラクター、どうでもいい物語。

つまらないことばかり、思い浮かぶのだ。理性のないところ、自動的に。

どうどう。

「今宵！」

首無しノミ三十の宣言がなされた。

「るっ天狗の押し寄せによる**意識ジャックくるつてん**の到来がもって、ある」
分かるような、分からないような。

ことごとく計算ドリルに間違つた答えを書き込んだ、それを振り飛ばす、小学一年生向け。脳への挑戦、それが首無し三十である。

首無し三十は続ける。聴衆は、上神守歌と灯塔刀徒、☆■○△夫妻に陛下にやんめの君だ。そして真唯も。

「これを見よ！」

十算ドリルが投げ出されたあとに現れたのは、小説文芸誌「群青海路」である。手に三三として、無い首の無い目で無い視線を紙面に落とす、無い。

シユープ・クルゴ<http://magazine.kairou.com/12/sprover/mbhaha.html>が現れた、語らいの一方として。東北地方より飛来せし男。対するはピツ

シーの湖のほとりから泳来せし男とも女ともつかぬホモサピエンス、イサク・ロイモン。<http://magazine.kairou.com/12/sprover/mbhaha.html>

「俺のターン！」

宣告を先に発したのはクルゴであった。

「学問としての文学！ 効果発動！ ハイパーテキストブレイに□撃！」

先手を打ちつける、手を痛める。

「ターンエンドう」涙目。

「わたくしのターンです」

ロイモン言語。

「積み上げられたカードの山に意識を集中し、その最上位置にあるたった一枚という運命の表面をなぞるように指を沿え、じりじりと引き、中ほどまでずらしたところ□でカードの山が崩れる危険を感じ、一度手を止める、だが怯まない、ここで怯んでは勝負に勝つことなどできようはずもないと自身を奮い立たせ、叱咤を歓喜に変換して意識を確約する、勝利へ、絶対の世界の唯一の自信と自身に誓って」

引き上げたカードを示す。薄絹族の言語における、はじめに吊られる者。

「ちやなななななな！ 効果発動！ 自身を狼へとロールチェンジ！」

ちやななななななは、ロールチェンジによって村の救世主へと姿を変える。

ハイパーテキスト村を自身の犠牲をもって救い出した。

「この議論にあるとおり！」首無し三十。

分かるであろう。意味など無い、首からして無いのだから。

「今こそ、ぐるってんをあばき、るつ天狗を現実へ引き出し、宇宙と大宇宙と大大宇宙と大大大宇宙の秩序を取り戻すとき！」

はじめから静まり返っていた場合は、相変わらず静まり返っていた。つまるところ、誰も関心をもって聞いていない。

だが、次の言葉が発された瞬間になって、すべては登場人物として扱われ、あらゆる推測と懐疑の的とされた。

「犯人はこの中にいる！」

「いよう、久しぶり」

全

員が首無し三十の話を知っているところに、<http://magazine.lancom.com/kyosaku/kyosaku.html>午前二時の使者は現れた。獅子座ルッテン群の襲来の夜だ。

「とりあえず、いろいろ何もも持っていこうかと思うんだけど、なんかある？」

「それはない！」

大声を発したのは☆■○△夫妻だ。夫妻は**二体にして一体**、そういった生物なのだ。

「この審問官である我が犯人などと！」

「そのとおり！ だから朕にもあらず！」陛下、言い添える。

まさに権力は偉大である。犯人でなくなった二人か三人かは、この中から消えた。いなくなってしまうた。

存在すら消し去ることができる、これが権力だからです↑**結論**。

「まあ、持っていく手間が省けたからいいけど、そろそろ行くよ、行っちゃおうよ？」

使者が告げる。最後通牒だ。

黙したままの上神守歌とやんめの君。静かに時を待つ。灯塔刀徒、今は級長力を使うべきときではないと判断した、使者は犯人を示しに来たわけでもなければ、ルッテン群という脅威でもない、これはミスリードだ！ **ミスリードだ！**

首無し三十、興味なし。おそらく、そもそも、午前二時の使者がどういふ存在かを認識していない。

ごくり、真唯だけが、ただ一体だけ、生唾を、**ごつくん**、した。

だが今、午前二時の使者すらも犯人の可能性をもつに到ったのではないか。この中に現れたのだから。とすれば簡単には居なくなることはできない。犯人でないという確信があったとしても、登場してしまつた人物としては、最後まで付き合わなくてはならない、それが**名探偵時空**なのだ。ゆえに。

「あれ、あれ？ おつかしいな、持ってけないぞ？」

こういうことになった。

「うわあ。ちょ、うわあ。まいったなあ。午前二時のうちに帰らないと**上司に叱られる**んだけどなあ」

「それなら」

提案したのは刀徒である。かおかおと、安息醜脳から赤白い光が彼を照らす、稼働中の証。

「今から犯人を名指そう」

視線を使者から首無し三十まで移動した。その先に、何もない空間を指し示す首無し三十の指がある。指のさす先。

ひとつかみ紙束。それは神か。

上 神守歌の紙芝居だ。その周囲に、何か居る。視覚にも聴覚にも、嗅覚や触覚や味覚にすら、何も感じないが、何もないそこに、何か居る。

「な、何もしてないわよ！」

思わず、動揺から声が出た。超常現象「紙芝居」常にあるものを越えた世界、そこは紙の上ではなく、神の居所ではない、現実の何か、誰ともつかない誰

か、そういうものが存在している、感じる。

まず味覚が反応した。わずかばかり、塩しよっぱいっぽい。涙の味だ。続いて触覚と嗅覚、存在感や圧迫感と呼ばれるような皮膚感覚と、蒸し上がる匂いに混ざって鉄サビ臭、汗と血だ。

聴覚は単に、**嗚咽**を捕らえた。

「おぬし」

やんめの君に声をかけられて、顔を上げた。視覚に映る。

「狂虚……右京居？」真唯。

「いや、違う」

やんめの君の、病みきった目がヒト際かがやく、**らんらん**。るー。

「違うな」

言い、刀徒を見る。刀徒は首無し三十を見ている。首無し三十、どうだとばかりに午前二時の使者を見ている。使者には、何が見えていたのか。

「やつめ、呼び寄せたルッテン群に取り込まれおったな」

やんめの君が断ずる。右京居を中心にして、ぐるぐるってんがあった。るっ天狗と化した人々が狂っていた、踊り。

「今ならいける！」掴んだ。持つて行く。「ばははーい！」午前二時の使者。「また明日の午前二時に会おうZE!!!」

名探偵時空は**消失**し、使者は役目を果たした。残ったのは、真唯だけだ。

くだらないことを、ほんやりと考えているうちに眠ってしまったらしい。

居間のソファから体を起こすと、時計を見る。長針と短針の踊らないダンス。午前二時か。わずかばかり、過ぎていくか。

「安息醍醐がほしい」

ひとつ、呟いてから、ひとりきりの家で、真唯は長い長いため息を出した。

本当のところを言えば、ほしいというよりも、持たせたい、父親に。真唯がとても小さかった頃には、すごくよく遊んでもらった気がする。記憶の中の父親は、とても好きな人だ。なんで、あんな人になっちゃったんだろう、と最近はとくによく思う。ありえない。

「寝よう」

ひとり、言う。着替えて、お風呂に入って、夕飯はいいや、そう考えながら。

発動し続けて、安息醍醐は刀徒が手で持っていられないほどに熱を帯びている。だが、握り締め、離さない。

「た、食べてる……」

驚きが言葉として守歌から漏れる、そのとおりに、安息醍醐は紙芝居を喰らっていた。

「食とは無限連鎖の自然を愛する心！」

首無し三十が叫ぶ。いつのまにか、無い首の座にしゃっぽが乗っている。やんぼー！ いちはやく抜け道を見つけ出し、ひとり逃げたやんめの君、その懐からこぼれたものだ。

紙 芝居すなわちルッテン群は、どうでもよい右京居であり、無意識による意識ジャックであり、無限連鎖の自然によって消し去られようとしている。無限連鎖の自然は、すなわち日常である。

取るに足らないこと、非日常のこと、意識しないようなこと、非常識なこと、不安定なこと、狂っていること。

すべてが安定的な自然としてあらしめるために消されてゆく。しかし、自然の本質はぐるってんだ。
「っくっ！」

刀徒の断末魔は、ただそれだった。安息醍醐があまりに軽い音で弾け飛び、余波でずたずたに裂かれ、

粉のような存在になる。

しかし、最後に刀徒は安息醍醐を持っていない手で、守歌に触れた。おっぱいたっち。ぽいんぽいん。級長力の瞬間的な爆発発動が、それによって実現した。おっぱい星人閣下が、その最後に、守歌のピンタで上げた声が、断末魔となり、守歌は使者の腹中から外へと飛ばされた。

食べ残された紙芝居は、計算ドリルとなっていた。首無し三十の**熱い無い視線**が注がれていた。

上神守歌は最強の高校生である。学園最強だ、並ぶ者もない。超常現象を司る「紙芝居」を自在に操る。学園は宇宙。

上神守歌は宇宙で最強の生物である。陛下からも、大宇宙審問所からも、認められる存在である。真唯はもう、守歌を見ることはなかったが、紙芝居はずっと、ずっと、眺めていた。

やんめの君が嘆息する。

「しゃっぽを失くしてしまった、やはりあのときのドサクサでか」

やれやれ、と口の中でだけ言う。このところ独り言が多くなっているのかもしれない。君を知るものは、もう、いない。君のことなど、誰も気にしていないのだよ。

「あのしゃっぽは、本来の姿で不安定をさらす自我のバランスを保つための装置なのだが」
いろいろなもの、不安に思えてきたとき、よく被っていたのだ。

今、まさにそれがほしい。

眠りに就く直前、真唯もそう思っていた。

この作品はフィクションであり、地球と紙芝居とキッスと教育委員会と無意識と秋山真琴「文学2.0」と夜のテンションと夜明けの敵と恵久地健一「天才論」と恵久地健一「濡れるのは裏側の臉」とちやななとおつぱい星人と不安と遥彼方「午前二時の使者」以外は、あんまり実在の人物や団体とかかわりはありません（敬称略）。